シリーズ《生き続ける文化財》　：　『上賀茂やすらい花』と世界遺産『上賀茂神社』

今年の葵祭は天候不順のため順延となりましたが、この日予定されていた『上賀茂やすらい花』は実施されました。幸い雨はわずかでしたので、子供の健やかな成長と地域の人々の厄除けを祈願する祭の一行が上賀茂地域を練り歩きました。やすらい花は、鞍馬火祭、太秦牛祭（現在休止中）とともに京都の三大奇祭に数えられています。それでは祭の一行とともに、大田神社や世界遺産『上賀茂神社』周辺を巡りましょう。

《ご紹介》

『上賀茂やすらい花』が 4 年ぶりに実施された。5 月 15 日に予定されていた葵祭は順延となったが、こちらは予定どおり行われた。北区上賀茂の岡本やすらい堂には朝から人が集まり、装束を着たおよそ５０人の人たちが午前 11 時に出発した。花を飾った大ぶりの花傘「風流傘」をおしたて、「鬼」に扮した踊り手や「かんこ」という二人の子供、そして歌い手などの一行が、「いんやすらいや花や 今年の花はよう咲いた花や」と歌いながら地域をまわった。この地域で古くからある大田神社で踊りを奉納し、明神川の流れる上賀茂地域を練り歩いて上賀茂神社に向かった。上賀茂神社では、今宮神社に向かって遥拝した後、「シャグマ」と呼ばれる茶色のかつらと赤い装束を身につけた「鬼」が、かねや太鼓を鳴らして踊りを奉納した。

やすらい花は、春の花が飛散する時、悪霊や疫神も飛び散って人々を悩ませるという言い伝えから、疫神を鎮めるために行われるようになったもので、稲の花が早く飛び散らないようにという農耕の予祝行事の意味あいも加わったとされる。そして花傘の中に入るとその年の疫をまぬがれると信じられている。この祭は上賀茂や紫野など市内の四地区に伝承されており、昨年 11 月には「風流踊」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。上賀茂やすらい花は、上賀茂岡本町・梅ケ辻町地区の住民による「上賀茂やすらい踊保存会」が中心になって保存継承している。

➢　上賀茂やすらい花

←↓やすらい堂

↓明神川

走り梅雨
茶毛振り乱し
疫払い

➢　大田神社

↓大田ノ沢

上賀茂神社の東約600メートルにある大田神社は、賀茂社造営以前からあるといわれる古社で、927（延長5）年成立の延喜式神名帳にも記載されている。恩多社（おんたしゃ）ともいわれ、上賀茂神社の境外摂社。本殿・拝殿は1628（寛永5）年の造替。大田神社参道東側にある大田ノ沢にはカキツバタの群生があり、5月には濃紫色の花を沢一面に咲かせる。このカキツバタ群落は国の天然記念物である。

この機会に、上賀茂神社が世界遺産「古都京都の文化財」の構成資産としてどのように登録されているのか見ておこう。上賀茂神社は、国宝の本殿、権殿をはじめとする36の国指定文化財で構成される。創建は古く7世紀末には有力神社となり、平安時代以降は国家鎮護の神社として朝廷の崇敬を集め、11世紀初頭までに現在に近い姿に整えられた。17世紀初頭には衰微したが、1628年に再興。再興後の本殿は17～19世紀にかけて7回の造替が行われ、現在の本殿と権殿は1863年再建のもの。この二つの社殿は同じ形状で東西に並び、正面3間・側面2間、正面に向拝をつけた形式で、檜皮葺、切妻造平入の屋根を基本に、前方の流れを長くした“流造”となっている。正面右が本殿であり、左の権殿は式年遷宮斎行のときに仮の本殿となる。上賀茂神社の後方には神社の聖域となる神山があり、世界遺産区域にはこの山も含んでいる。

境内には御手洗川（ならの小川）が流れ、そこで葵祭の斎王代御禊（さいおうだいみそぎ）が行われる。この川は、賀茂川の志久呂橋下流にある明神井堰（いせき）で取水し、上賀茂神社境内を南流した後、明神川となって社家町を東に流れていく。賀茂氏渡来以前からある集落と上賀茂神社造営とともに形成された社家町、そしてこれらの土地を潤す明神川のもとで、地域の祭として『上賀茂やすらい花』が営まれていたのである。

➢　大田ノ沢のカキツバタ群落

・カキツバタ

➢　上賀茂神社

子を守る
傘に花咲く
カキツバタ

➢　上賀茂神社周辺地図（※国土地理院地図）